

近世 603
狭義に安土・桃山・江戸を
含むという

日本史(近世) 226

5,965P-1/2 日本史(近世) 209

226 1573の室町時代 209

第九十九章 近世(安土・桃山・江戸時代)

弱小土豪が少数の大領主に統合され、全国を統一する機運が満ちてきた。その時流に乗って、天下統一への巨歩を踏み出したものに越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄、駿河の今川義元・尾張の織田信長等があった。このころの全国統合を目指す者達には、先ず室町幕府に近づき、あるいは皇室に献金するなどの。そして、古代勢力の利を利用しようとした。その一環として、京都への進出を企てた。この最初の成功者が、織田信長であった。尾張国の守護代から出た織田信長は、桶狭間で今川義元に勝利して以後、近隣諸大名を平定し、一五七三年に足利幕府をも滅亡させた。織田信長は、武田信玄の子勝頼を三河の長篠において破ったのち、天正四年(一五七六)に江の安土に壮大な城郭を築き、ここを本拠とした。

教科書 226 11/18 鋼 970
305

元 304^P 59 759
209^P

5.965^P - 2/2

改訂

しかし織田信長は、中国地方平定の途中、京都
本能寺で明智光秀に襲われ、全国制覇の事業半
ばにして自刃。
豊臣秀吉によって戦国大名の統
合が完成し、ここに近世封建社会がひらけて
くる。(「日本史」大阪教育図書刊、昭和四
十年六月一日、二〇九頁、二二六頁。「云辞
苑」へ織田信長参照)

(*)

織田信長は内大臣(一五七六)豊臣秀吉
は関白・太政大臣(一五八六)となり、朝
臣として最高位についた。
織田信長・豊臣秀吉の二人は、共に、幕府
を開かず、変則的な武家政治を行なったが、
これは、政治的基盤が弱かったので、
社会を統一するのに皇室を利用しようとした
からであった。
(朝廷の儀式)
信長は上京後、朝儀を復興し、皇室御料地
を奉った。秀吉も皇居を造営し、後陽成天皇

又

5966P-1/2

日本史(明治)
240P

日本史辞典100P

改訂

を聚楽第に迎えて、諸侯に忠勤を誓わせたり
した。
■さらに、続く徳川家康もまた、慶長八年(一
六〇三)征夷大将軍に任じられ、江戸を幕府
の本拠地と定め、徳川幕府三百年にわたる武
家政権の基を開いた。家康も、皇室を利用し
たのだった。(「日本史」大阪教育図書(株)、
昭和四十年六月一日、二三四頁、二四〇頁参
照)

*

江戸時代の名を指す

天の
改行
何人 1682

5.966P-2/2

全5984/2
次26 1099
灰燼 354
辛うじて 461
灰燼 354

なるほど皇室は、
へ打ち続く戦乱の灰燼を、辛うじてか
いて来た。✓
というだけのことであつて、実質的にはも
や、富も力も全く持っていない。なかつた。
トー、天皇は、名目だけのことはいえ、日
本国の頂点に存続しつづけた。
本書記には、
天皇は神の直系の子孫天皇には下自ずか
ら、日本国の頂点に立つべきいわけがあるの
に、なるほど、神の血筋を正統に受け継いで
いる者など出来ないので、
という思想によつて貫かれ、記述されて
いる。
そして、この思想は、
経た後の世においてさえ、
脈々と生きつづ

灰と塵
灰と塵でない
灰と塵をえさ

まようん 574°
驚嘆 驚いて感へするこ

5,967^P

■ 信長・秀吉・家康といった偉大な覇者達も
天皇に曰 禅譲を迫ろうとはどあえて
しなかった。

■ たとえ、
「天皇にとって代わって、天子になった
としても、社会的に決して承認され得
ないことを、誰もが充分認識していたからで
ある。」

これは、まさしく、驚嘆すべきことといわ
なければなるまい。

■ 日本書紀という一編の書物が、
「かつて予想された通り、禅譲を阻み続
けた」
と見るべきであらう。

*

5

■もつとも徳川幕府は、朝廷が再び巨大な富
と力を得、そして反幕的になる。の恐小

た。

■そこで幕府は、表面的には、朝廷を尊崇して

いる風を装い、廃止されていった儀式典礼など

を再興したけれども、その反面、機会

あるごとに干渉して、その勢力を弱めた。

■かくして、朝廷は、全くの儀礼的機関とな

り、幕府の統制下に置かれつづけた。

■なお、朝廷の料地は、わあか三万石にすぎ

ず、公家の所領を加えてさえ十萬石に足りな

いほどのささやかなものであった。(「日本

史」大阪教育図書社、昭和四十年六月一日、

二四四頁参照)

■加賀百萬石、肥後五十萬石など、比

てみると、朝廷の料地がいかに小さなもの

であつたかが分かる。

米

49.9.7(日)
46.8.5(金)

組37 鳴うな1611P

5,969P

214P
4169P

1やくに何んき
年天日本紀云1028

ト部云215
紀(い)36~37

日本書紀研究について
鎌倉時代中期の神道家土部兼方は、父兼文
の日本書紀研究を基に、従来の書紀見解を果
大成して『新日本紀』(日本書紀の注釈書中
いちばん古いもの)を書いた。
兼方は、平安期の私記や、いまは現存しな
い古書等を多く参照し、奈良時代し平安時
代以来の学問の伝統を伝え、言葉の意味とか
字句の読み方などを丁寧に記述した。
なお、この『新日本紀』の解題において、
へ『旧日本紀』という本が『日本書紀』よ
り前にでき、実は『日本書紀』は『旧日本紀』
をもとにしてつくられたと記述されている。
と記述されており、注目される。「荒筋」第三編
第七十六章「国史編纂」の項において既述
先述の
この関係を説明する為、
神になつて現われたとする『本地垂迹説』が唱え
られた。
とところか、鎌倉時代から以後になると、逆
に神が本位であるとする『神道説』(逆本地垂迹

どでない。
懐賢と考へて

説せつかあらわれてくる。

鎌倉時代には伊勢いせの外宮ぐわうで伊勢神道いせしんどうが成立せいりつし

室町時代にはト部家の流水りゅうすいをくむ京都の吉田神

社の吉田よしだ兼俱かねぐもが大成たいせいした吉田神道よしだしんどうなども出でて

きて、公家などの間で、こくら神道説しんどうせつが

さかに行いなゆれた。

神道説しんどうせつは、日本書紀にほんしょき、旧事本紀きゅうじほんぎ、古こ

事記しきの三つをたつとび、中でも日本書紀にほんしょき

を神書しんしよとして最も重んじた。その場合、日本書紀にほんしょき

本書紀ほんしょきのすべてを重視したので、

神かみのことが書かれてゐる第一巻と第二巻、

ゆりる神代史しんしろしの巻を尊重そんちょうしたのだった。

■なお、

(1)伊勢いせの外宮ぐわうでは、神道五部書しんどうごぶしょと呼ばれ

るものが編集へんしんされた。

(2)南北朝時代なんぽくしやうの忌部正通いんべまさみち（生没年不詳）の

日本書紀にほんしょき口訣くけつ（貞治六年、一三六七著述）や

応仁おうにんの乱らん頃ころの一条兼良いちじょうかねらう（一四〇二—一四八

一）の日本書紀纂疏さんそなどか、神道説しんどうせつの立たち

場で書かかれた、

一条兼良いちじょうかねらう（かぬらとら）

紀上41^P

18年26^P
紀上59⁺

紀上59^P

5.971^P-1/2

紀上57^P

うなが
促す 元 203^P

と川う。(「日本書紀」井上光貞、中央公論社、三八頁参照)

米

近世における儒学を中心とする学問の興隆は、日本の古典に対する学問的研究の発達を促した。
日本書紀に對しても、中世には見られなかつた客観的・実証的な研究が展開されることとな

り、江戸時代にはいつてはじめて、書紀研究が学問化したといえよう。

つまり、中世的な神秘主義を脱却した合理的主義の傾向が示され、
神典として神秘的にのみ仰ぎみられたきた記紀に對し、
批評的眼光が注がれるようになった。
江戸中期の新井白石(一六五七-一七二五)は、

享保元年(一七一六)に「古史通」を著わした

新井白石は、

「神話にも合理的な解釈を施す」

というところに重点をおき、

改訂

へ記紀の神代巻では、神々の活躍を述べているが、
それを神とは考えない。これは実は人なので
ある。という考え方をした。
すなわち、
神は人なり。
というのである。
次いで、和学者谷川士清が、延享四年（一
七四七）に『日本書紀通証』という注釈書を
刊行した。
『日本書紀』はどのようにに編纂されたかと
か、『日本』とはどういう意味であるとか、
『書紀』とはどういうものであるとか、読み
方の原則はどうかというようなことが書かれ
ている。
しかし、中世的なもの、その流水をくむも
のを数多く引用し、それに強く影響を与えて
いるとは否定できない。
それから三、四十年後に、『書紀集解』と
いう書物が出る。これは、尾張の国学者の河

ひん 壁 ではない。 紀558 前9所

5.972-1/2

紀小40?

1785
1787
38

紀上57?
紀小39?

村秀根（一七二三—一七九二）という人か、
父の研究を基にして天明五年（一七八五）こ
ろ成立させたものである。
・河村秀根の学問態度は非常に独自性があり
神道の影響からほとんど脱却している。
・中世以来のいろいろな学者の説はとりあげ
ず、旧事本紀などからも離れて、日本
書紀をそのまま読み、日本書紀の
の成立過程を書き、日本の国号はなんといっ
たかとか、日本書紀をつくった著者はだ
れであるとかいった基本的なことを述べてい
る。
・また、日本書紀の文章が、中国のどう
いう書物の文辞に基づいているかという出典
論に、非常な力を注いでいる。
■なお、通証と集解とは、近世書紀
研究史上の二大高峰であるのみならず、今日
にいたるまで、書紀全体にわたる注釈書とし
て双璧の地位を失なっていない、といわれて
いる。

● 一方、日本書紀のかげにかくれて、成立以来長年月にわたり忘れられたかのごとき存在であった。古事記が、本居宣長（一七三〇—一八〇一）によってにわかには脚光をあびるようになった。

● 本居宣長は、寛政十年（一七九八）に古事記伝を完成し、訓義や字義の注解においてきわめて実証的な成果をあげたにとどまらず、古代人の風俗・習慣・思想等についてもすぐれた理解を示した。

■ さらに、山井蟠桃が享和二年（一八〇二）に著わした『夢の代』や、上田秋成が文化五年（一八〇八）に著わした『胆大小心録』にいたって、神代説話を以て後世の作爲の産物とする画期的な見解が表明された。

● ことに前者では、神代説話はかりでなく、神武天皇以後仲哀天皇の部分までも客観的に史実の記録とは認めがたいとした点で、後年の津田左右吉の研究の結論とほぼ一致しており、その先駆的意義が高く評価されている。

H9.9.7(日) 429(2017)12.15(金)へ
H1.12.7(木) 正T

5,973^P

辛酉革命元1165^P 紀元は2600年. 伴信友元1842^P
1940 660
どういかん元1575^P ほうこうぼつ元1090^P

合^{ごう}理^り主^{しゅ}義^ぎの精^{せい}神^{しん}は、日^{にっ}本^{ぽん}書^{しよ}紀^きの紀^き年^{ねん}の客^{きやく}観^{かん}
的^{てき}な不^ふ合^{ごう}理^り性^{せい}をも着^{ちやく}破^ぱさせる^{にいたった}とい^いな^なつ^つた^た。
●藤^{とう}貞^{てい}幹^{かん}は、天^{てん}明^{めい}元^{げん}年^{ねん}一^い七^{しち}八^{はち}一^{いつ}に^に日^{にっ}本^{ぽん}書^{しよ}紀^きの紀^き年^{ねん}の客^{きやく}観^{かん}
を著^{ちやく}わし、神^{しん}武^ぶ元^{げん}年^{ねん}辛^{しん}酉^{ゆう}から六^{ろく}百^{ひゃく}年^{ねん}を
減^{げん}じなけ^なれ^れば外^{がい}国^{こく}との年^{ねん}紀^きが合^あわ^わな^ないこ^ことを
はじ^はめ^めて唱^なえ^えた。
●また、本^{ほん}居^い宣^{せん}長^{ちやう}の門^{もん}人^{にん}である伴^{はん}信^{しん}友^{とも}は、日^{にっ}本^{ぽん}書^{しよ}紀^きの紀^き年^{ねん}が辛^{しん}酉^{ゆう}革命^{かくめい}の説^{せつ}によ^よつて
本^{ほん}紀^き年^{ねん}曆^{れき}考^{かう}（日^{にっ}比^ひ古^こ波^は衣^え所^{しよ}収^{しゆ}）を著^{ちやく}わし、
日^{にっ}本^{ぽん}書^{しよ}紀^きの紀^き年^{ねん}が辛^{しん}酉^{ゆう}革命^{かくめい}の説^{せつ}によ^よつて
作^{さく}為^いされ^れたものであるこ^この論^{ろん}証^{しやう}を行^{おこ}な^なつ^つた
（「日^{にっ}本^{ぽん}書^{しよ}紀^き」井^い上^{じやう}光^{くわう}貞^{てい}、中^{ちゆう}央^{やう}公^{こう}論^{ろん}社^{しゃ}、三^{さん}五^ご
と四^し五^ご頁^{へつ}。「日^{にっ}本^{ぽん}書^{しよ}紀^き」(上^{じやう})日^{にっ}本^{ぽん}古^こ典^{てん}文^{ぶん}学^{がく}大^{だい}系^{けい}
岩^い波^は書^{しよ}店^{てん}、五^ご三^{さん}と六^{ろく}の頁^{へつ}参^{さん}照^{しやう}）

*